児玉地域における古墳時代前期の土器様相 (上)

－女堀川・旧赤根川流域の古墳時代前期の土器の分析を中心として－

松　本　　完

はじめに

児玉地域は、現在の行政区分の埼玉県北部、上里町、神川町、本庄市、美里町の範囲にあたる。いわゆる北武蔵の北部を占める範囲であり、古代以来の郡名では、おおむね賀美郡、児玉郡、那珂郡の領域に相当することが推定される一帯である。

地形的には、北西側を神流川に、北東側を利根川、烏川により画され、南西～南側は、上武山地の一部、児玉丘陵、松久丘陵の一部を含み、南東～東側は、櫛挽台地により画された範囲である。また、丘陵から切り離された浅見山丘陵、生野山丘陵、山崎山丘陵、諏訪山丘陵などの残丘が、所々南西 - 北東方向に延びている。

古墳時代前期の遺跡のほとんどは、本庄台地や児玉丘陵上、浅見山丘陵、生野山丘陵、山崎山丘陵、諏訪山丘陵などの残丘上、小山川 (身馴川) や志度川、天神川などの流域の台地、低地内の微高地上に位置する。

本稿では、とくに本庄台地の南東半を流れる女堀川中流域下部[1] 右岸の久下東遺跡、久下前遺跡、北堀久下塚北遺跡、北堀新田遺跡、北堀新田前遺跡から出土した古墳時代前期土器の分析を足掛かりとして、女堀川・旧赤根川流域、さらに児玉地域全体の古墳時代前期の土器編年、土器様相について論及する。

久下東遺跡、久下前遺跡、北堀久下塚北遺跡、北堀新田遺跡、北堀新田前遺跡の 5 遺跡 (恋河内・松本 2008、松本・大熊ほか 2009、恋河内・的野 2010 ほか) は、同一の台地面に隣接する遺跡であり、切り離すことができない一つの遺跡であることが明らかである。

よって、以下の記載にあたっては、全体の総称として、遺構密度などの点で集落遺跡全体の中心をなすと考えられる 2 遺跡の名称を用い「久下東･久下前遺跡」と仮称する (個別の遺構名称を指示する場合には、従前の遺跡名を用いる)。

とくに土器編年の軸となる S 字状口縁台付甕形土器 (以下､「S 字甕」と表記する。その他の器種も同様に「形土器」を省略した表記を用いる) を含む甕、壺、鉢･埦、甑、高坏、器台の編年に関しては、久下東・久下前遺跡の所在する女堀川・旧赤根川流域の諸遺跡から出土した該期土器の分析を軸として議論を進める。

土器編年に関しては、児玉地域全体における古墳時代前期の土器を視野に入れ分析を行ない、まとめとして、児玉地域における土器様相全体について一望するとともに、他地域との併行関係についての試案を記すことにしたい。

また、本稿では、集落遺跡出土土器を中心に分析することもあり、墳墓出土土器については、時期的な位置付けなど直接論及する余裕はないが、折に触れ参照し、該当資料を示す。

なお、本稿で「古墳時代前期の土器」と呼ぶのは、S 字甕の出現段階以降、古墳時代中期と考えられるヘラナデの平底甕や脚柱状部が中膨らみとなる屈折脚有稜高坏が盛行する前の段階までの土器と考える。

児玉地域では、古墳時代前期に先立つ段階に、漸次東海西部系土器が出現するが、以降の土器様相の推移からみて、生活用具の中核をなす甕が一新される、S 字甕の出現、定着こそ、最も大きな画期をなすと考えられるからである。

後述するように、児玉地域で最初に出現する S 字甕は、安達厚三、木下正史の分類 (安達・木下 1974) を継承した赤塚次郎の分類 (赤塚 1990・1997 ほか) の「B 類」と類似点が多い。S 字甕の分類および、児玉地域における出現過程の詳細については、後段で触れる。古墳時代前期の前段階については、異論のあるところであり、多分に議論の余地を残すが、暫定的に「弥生時代終末期」の呼称を用いる。

児玉地域の古墳時代前期の土器に関して、前葉、中葉、後葉、末葉の 4 つの時期に区分する試案をもっており、以下の記述において、その時期区分の内容を示してゆきたい。

「弥生時代終末期」、「古墳時代前期前葉」の区分を明確化するには、児玉地域では、主要な分布範囲を異にする平底甕と台付甕のくの字甕、S 字甕の時間的な推移を見極め、三者の併行関係を整序することが不可欠であり、前半では、この問題に様々な角度から触れることになる。

これまで、埼玉県内の古墳時代前期、あるいは弥生

時代終末期から古墳時代前期にかけての土器様相、とくに土器編年に関しては、多くの研究がある(赤熊・福田ほか2011、書上1994、柿沼1996・2006、小坂2014、埼玉県史編さん室編1982、坂本1984、笹森1993、杉崎1993、山川・石坂・福田1998、横川1982ほか)。

また、児玉地域の該期の土器様相、土器編年についても、様々な研究成果が蓄積されている(大谷・福田ほか2011、柿沼2015、金子2000、恋河内1990・1991・1999、坂本・利根川ほか1986、田中・末木・福田1997、長滝・中沢2005、増田・立石1983a、山川1984ほか)。

こと細かく触れることはできないが、本稿がそれらの諸成果に大きく依存していることを明記しておきたい[2)]。

Ⅰ　児玉地域における古墳時代前期の土器の分類と編年

古墳時代前期の土器は、おおよそ甕、壺、鉢・埦(片口鉢、台付鉢を含む)、甑、高坏、器台、ミニチュア土器の7器種ないしは8器種に分けることができる。

以下、甕、壺、鉢・埦、甑、高坏、器台の順に、分類と編年に関して記すことにしたい。なお、ミニチュア土器に関しては、例数もわずかであり、省略する。

1　甕の分類と編年

該期の甕は、形態的に大きく分けて平底甕、丸底甕、台付甕の3種に分けることができる。以下、平底甕、丸底甕、台付甕の順に分類案を示し、変遷の大要を記すことにしたい。

それぞれの甕は、法量により大型、中型、小型や中型、小型の区分が可能な場合があるが、ここでは量的にも卓越する中型の甕を主に扱う。

なお、分類に関しては、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての土器様相の推移について述べる必要上、弥生時代終末期の甕を一部含む分類となっている[3)]。また、前期末葉との関係から、一部中期前半の甕を含み分類する。この分類枠の拡張は、後述する甕以外の器種でも必要に応じて行なう。

a　平底甕

平底甕は、以下のA～I類の9類に大きく括ることができる。「A1類」、「A2類」、「B2a類」、「B2b類」というような細分を適宜行なう。なお、A類、B類に関しては、例数は少ないが、平底甕だけでなく台付甕があり、同じ細分呼称を用いる。

各類型の推移、変遷については、第1・2図に示した。

A類

口縁部から胴部上位あるいは中位にかけて櫛描文の施された甕を、A類とする(第1図1・11)。樽式土器あるいは樽式系土器(飯島・若狭1988、若狭1990・2007)の甕である。

端部の装飾、口縁部の折返しの有無、櫛描文の組み合せ、施文部位などの諸特徴、器形などで種々の分類が可能ではあるが(大木2020ほか)、弥生時代終末期から古墳時代前期の土器様相の推移を考える当面の目的に沿って、便宜的に下記のように分類する。

A1類　弥生時代後期以来の波状文、簾状文あるいはその組み合わせからなる櫛描文の施文された甕である。くびれ部がゆるやかに彎曲し、胴部の張りもさほど強くない器形がほとんどである(第1図1)。

弥生時代終末期には、多く櫛描波状文が乱れ、休止点間の間隔の広い櫛描簾状文が盛行するようである(坂本・利根川ほか1986：96-101頁)。

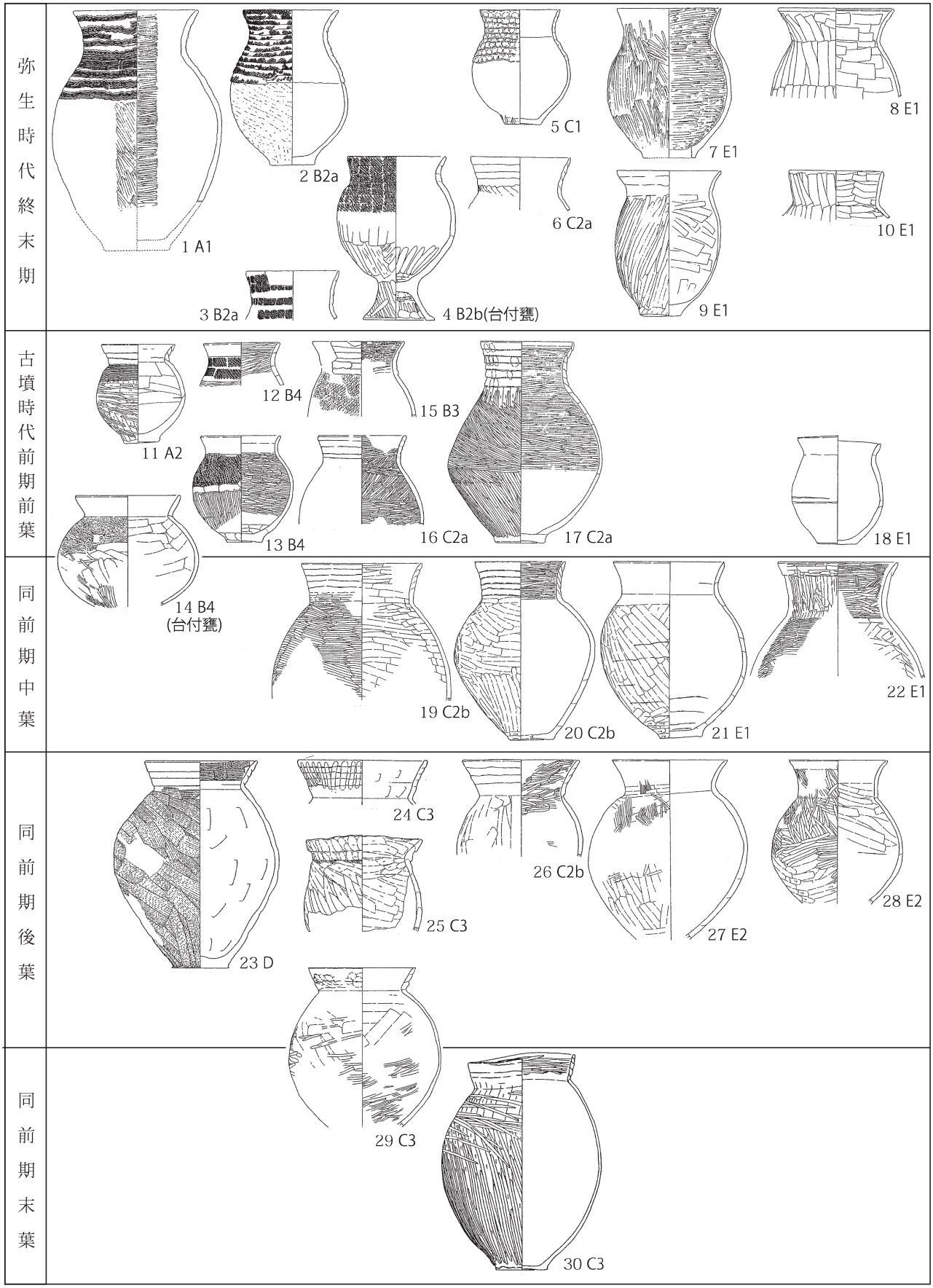
A2類　口縁部～くびれ部にかけて、C類と同様の輪積痕を段として残し、以下櫛描文が加えられる甕である。類例に乏しく、真鏡寺後遺跡F地点49号住居跡[4)]出土土器(第1図11)(恋河内1991:第39図2)を掲げうるに過ぎない。

B類

口縁部から胴部中位あるいは上位にかけて、あるいは同部位の一部に縄文の施された甕を、B類とする(第1図2～4・12～15)。吉ヶ谷式土器あるいは「吉ヶ谷系土器」(柿沼1994・2015ほか)[5)]、赤井戸式土器(小島1983、深澤1999ほか)とされてきた甕である。B類は、以下のように細分できる。

B1類　口縁部から胴部中位にかけて全面に縄文が密接して施された甕である。吉ヶ谷式土器の典型例ともいえる甕である。端部の加飾や器形などに、種々の時間的推移がみられる(柿沼2015ほか)。現状では、弥生時代終末期以降、本地域では、B1類に該当する例は極めて限られるようである。

B2a類　口縁部から胴部中位にかけて輪積痕を段として残し、その部分全面に、B1類同様に縄文を加える甕である(第1図2・3)。



第１図　平底甕Ａ～Ｅ類の変遷（一部台付甕を含む。縮尺：１／８）

B2b 類　平底甕の例はなく、台付甕になるが、ここで触れておく。口縁部から胴部中位にかけ全面に縄文が施文されることは、B2a 類と同じであるが、輪積痕の段がくびれ部以上に限られる甕である。段の数も3、4 段となり、くびれ部は屈折気味となる（第 1 図 4）。

B 3 類　くびれ部以上に輪積痕を段として残し、以下縄文が施される甕である (15)。

B 4 類　くびれ部以上が無文で、縄文が施される甕である (12 ～ 14)。14 の甕は、全体的な器形からみて台付甕になる可能性が高い。また「反撚」(鈴木・尾内ほか 2010：11 頁) とされる特殊な原体の縄文が施されているようである。

C 類

口縁部からくびれ部あるいは胴部上・中位にかけて輪積痕を段として数段残す甕を、C 類とする (第 1 図 5・6・16・17・19・20・24 ～ 26・29・30)。吉ヶ谷式系の甕あるいは赤井戸式の甕とされてきたが (柿沼 2015、深澤 1999)、位置付けについては後ほど記す。このC 類と後述するE 類に関しては、弥生時代終末期と古墳時代前期の境界線が問題になるため、以下のように細分する。

C 1 類　口縁部から胴部中位にかけて輪積痕を段として残す甕である (第 1 図 5)。総じて輪積痕の段は、南関東の弥生時代後期、久ヶ原式の甕の輪積痕の段によく似た、粘土紐の外傾接合と指頭によって圧着する手法により作出されている。

C2a 類　口縁部からくびれ部にかけて輪積痕を段として残す甕である (6・16・17)。C1 類に比べ、輪積痕の段数が 3 ～ 6 段と減少し、器形的にもくびれ部以上が細くすぼまり、それまでの甕とは異なるようである。輪積痕の段が不明瞭な例が含まれる (16)。

C2b 類　輪積痕の段がくびれ部以上に縮約される点は、C2a 類と同様であるが、最下段の段から口縁部が屈折して立ち上がる形態の甕である (19・20・26)。輪積痕の段が部分的に不明瞭になり、また外傾接合ではなく、内傾接合の例もみとめられる (19・26)。胴部中位以下が長く、底部にかけて直線的にすぼまる、独特の器形の甕がみられるようになる。

C 3 類　輪積痕の下段から口縁部が屈折して立ち上がることはC2b 類と同様であるが、段がナデ消されたり、押圧され、不明瞭になる甕である (24・25・29・30)。段数も減ずる傾向がみられる。

D 類

くびれ部が屈折し、短い口縁部が付く器形で、口縁部に輪積の段、胴部にハケの施された甕を、D 類とする。

今のところ雷電下遺跡 A 地点 25 号住居跡からのみ出土しており (第 1 図 23)(横川・増田・駒宮 1979：第 47 図 2)、類例がみられない。雷電下遺跡 25 号住居跡出土例の場合、報告書の挿図では、他のハケ甕とは異なる「ハケ」の表現がなされており、あるいは狭義のハケとは異なる、条線の入る板ナデによる最終調整が成されているようにもみえる。

E 類

器形的にはC 類の甕に似るが、輪積痕の段を残さずナデないしはミガキの施された甕である。後述するG 類と同じいわゆる平底のナデ甕になるが、器形的には、樽式、吉ヶ谷式の甕に類似した胴部の張りの弱い細長い器形である (第 1 図 7 ～ 10・18・21・22・27・28)。

E 1 類　ナデないしはミガキの施された平底甕のうち、くびれ部がゆるやかな曲線を描き屈曲するものを、E1 類とする (7 ～ 10・18・21・22)。

E 2 類　E1 類との違いは、くびれ部が強く屈折する点である (27・28)。

F 類

ハケの施された甕である。口縁部は、ナデ付けられ無文となるものがほとんどである。胴部にケズリが加えられる場合がある。中・小型の甕が大半である (第 2 図 1 ～ 5・7 ～ 9・11・13 ～ 15・17・18)。

G 類

ヘラナデの施された甕である。中期段階に盛行する平底のナデ甕に連なる甕である (6・10・16・20・21)。

H 類

口縁部がS 字状に屈曲する平底甕である。胴部の調整・装飾は、基本的に台付のS 字甕と大きく異なることがない。器高が 10㎝に満たない小型のものは鉢に含めたため、大型の鉢とみることもできるが、強いて分けることができないこともあり、ひとまず平底甕に含めた。例数がごく限られるため、図示していない。

H 1 類　S 字状の口縁部の平底甕のうち、胴部外面の調整がハケのものを、H1 類とする。

H 2 類　H1 類と形態は同じであるが、胴部外面の調整がヘラナデのものを、H2 類とする。

I 類

タタキ技法により成形された平底甕である。古墳時代前期以降の例としては、川越田遺跡出土例 (富田・赤熊 1985、恋河内 1991) のみである (第 2 図 12)。

ほかに口縁部形態などに特徴のあるいくつかの平底

甕、あるいは系統の異なる平底甕があるが、当面以上の諸類型でこと足りるかと思う。

平底甕に関しては、樽式、樽式系のA類、赤井戸式あるいは広義の吉ヶ谷式、吉ヶ谷式系とされてきたB～E類[6)]、現状では系統を確定しきれないF・G類あるいはH類、畿内あるいはその周辺地域の甕の系統であるI類に大きく分けることができる。

以上の分類に基づき平底甕の変遷過程についての試案を示す(第1・2図)。

A類は、利根川章彦や若狭徹がすでに指摘したように(坂本・利根川ほか1986：96-101頁、若狭1990：13・14頁)、弥生時代終末期になると器形変化や櫛描波状文の波形の乱れなど、いくつかの衰微を示す兆候がみられるようである。

また、弥生時代終末期以降、平底甕の口縁部から胴部にかけて輪積痕を段として残す手法が盛行するが(本稿の平底甕 C類の手法)、この手法と櫛描文は相容れないらしく、A2類としたわずかな例(第1図11)を残し、古墳時代前期前葉には、櫛描文は、甕の装飾手法としては姿を消すようである[7)]。

B類は、A類とはやや異なった経路で変遷するようである。

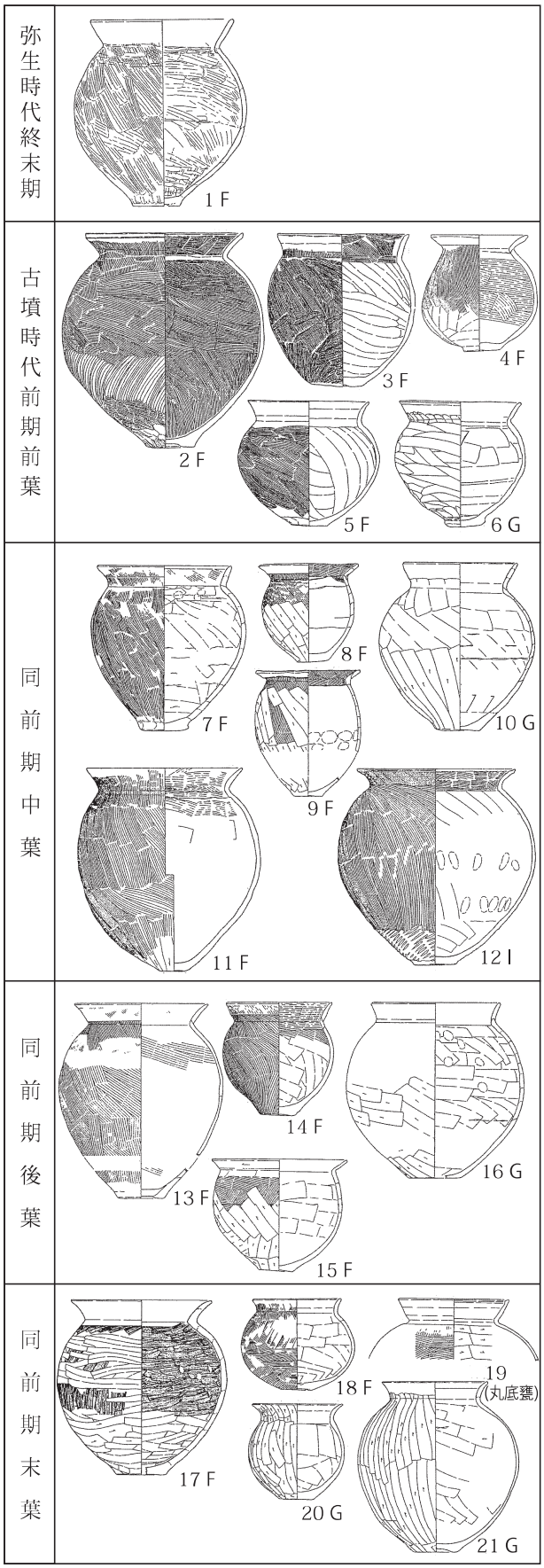
B1類は、口径が減じ胴部の張りが強くなるなど器形変化がみられるものの、弥生時代終末期まで存続する(柿沼2015、恋河内1990)。

弥生時代終末期には、B2類が出現する。C類をも含め輪積痕を段として残す装飾手法は、久ヶ原式、吉ヶ谷式や赤井戸式にもみられるが、弥生時代終末期の甕にみられるその種の手法は、現状では来源が突きとめられていない。また「鴨居上ノ台式」(大村・菊池1984)などをも含め、広域にわたり連動する現象の一部である可能性も捨てきれない。

B2a類の典型例として、大久保山遺跡ⅢB区9号住居跡出土例を示した(第1図2)(小澤1996：第15図1)。第1図2の甕の場合、粘土紐を指頭により圧着したまま輪積痕の段を残すため、外面には凹凸が残り、上下の帯縄文間、縄文の施文単位間は密接せず、空隙がみられる。

また、第1図3の甕(坂本・利根川ほか1984：第35図9)も、B2a類に含まれる。図では判りにくいが、輪積痕の段が明瞭に残るようである。

輪積痕を段として残す手法の導入が、吉ヶ谷式を特徴づける手法である胴部中位以上の全面密接縄文に変容をもたらしたとみることができるし、密接縄文とは相容れない凸凹した輪積痕を残す手法を取り入れたこ



第2図　平底甕F・G・I類の変遷
(丸底甕を1例含む。縮尺：1／8)

と自体が、密接縄文に対するある種の意識の変化を表すとみることもできる。

B2b 類にみられる輪積痕の特徴や器形の特徴は、明らかに次段階への傾斜とみてよいであろう。台付甕であることも、在来の平底甕からの逸脱と考えられる。

B3・B4 類は例数が少ないが、ともにくびれ部以下に縄文が施文されることで共通する。

B 類の平底甕の時間的な推移は、B3 類の例数がごく限られるなど問題がないわけではないが、B1 類→ B2 類→ B3 類としてとらえることができる。B4 類に関しては、独立した時期を充てるにたる例がみられないことから、当面 B4 類は、B3 類と併存したと考える。

B 類は、児玉地域では、前期前葉まで残存するが、中葉以降残存したことが確かな資料は、現状ではみられない[8)]。

C 類は、A・B 類に取って代わった類型と考えてよいであろう。本稿での分類は、D 類をも含めて、恋河内昭彦が示した該期の輪積甕 (「甕 B 類」) の「B2・B3・B4 類」(恋河内 1990:41 ～ 56 頁) と大きく異なるものではない。また、時間的な推移に関する考えもおおむね一致している。

C1 類は、かなり例数が限られるが、破片資料では、C1 ～ C3 類の区別がむつかしいことも一因であろう。

C2a 類は、くびれ部以上の開きが弱く、口径が小さい独特な器形である。壺に近い器形とみることもできる。以降の変化からみると、この段階が器形変化の起点をなすことが判る。内外面「甕磨き手法」(青木・飯島・若狭 1987：135 頁、福田 2013：184-190 頁）による器面調整がなされる例もみられる（第 1 図 17)。

C2b 類では、胴部の中央よりやや高い位置に胴部最大径部位を有する器形に落ち着くらしい。内傾接合がみられるようになるのは、輪積痕を段として残す手法の衰勢を、土器製作手法との関連で直截表していると考えられる。

C3 類は、平底甕 C 類の最終段階と考えてよいであろう。第 1 図 30 は、念仏塚遺跡 8 号住居跡から出土した甕（恋河内 1990：第 42 図 18、報告書は未刊行）であるが、共伴する土器から、「確実に小形丸底壺を伴う段階」(同上：54 頁）とされている。30 の甕は、他の甕に比べ器形的に崩れており、C3 類の一部は、古墳時代前期末葉あるいはそれ以降まで残存する可能性が高い。

C3 類のさらなる変化は、輪積痕を段として残す手法がみられなくなることである。この場合、実質的にナデ、ミガキ調整の平底甕 E 類との区別がなくなり、また C3 類の残存時期からみて、中期に盛行するナデ調整の平底甕 G 類と接続することも考慮せざるをえない[9)]。

C 類の平底甕の時間的な推移は、C1 類→ C2a 類→ C2b 類→ C3 類と考えられる。それぞれ弥生時代終末期[10)]、弥生時代終末期から古墳時代前期前葉にかけて、次に前期中葉、そして同後葉から末葉にかけての時間幅を充てることができる。

D 類 (第 1 図 23) は、共伴する土器からみて、前期後葉と思われる。雷電下遺跡 A 地点 25 号住居跡出土土器 (横川・増田・駒宮 1979：第 47 ～ 50 図) は、時間幅のある土器が混在しており注意を要するが、残存率の高い土器に関しては、ごく一部を除いて、古墳時代前期後葉、同中期前半の土器が混在する資料であり、D 類の甕は、前者に伴うとみて無理はない。

E 類は、弥生時代終末期以降、器形などに細かな変化がみられるものの、古墳時代前期を通じて継続してみられるようである。E1 類→ E2 類の変化が考えられる (第 1 図)。

F 類も、古墳時代前期を通じてみられる。時間的な推移が判然とせず、由来も一律ではないのかもしれない。おおむねくびれ部の屈折が明瞭化し、とともに口縁部外面の無文化が進行し、前期末葉には、胴部の丸みの強い中期的なナデ甕、G 類がみられるようになり、F 類、G 類が交替するように中期前半へと移行するというような粗筋をたどることができるが、それらの変化が一線を画して生起したわけではない。

また、前期中葉、後葉には、部分的にナデ、ケズリが加えられた独特の器形の F 類の甕 (第 2 図 8・9・13) がみられ、系統なども問題になる。古墳時代前期に、平底のハケ甕が盛行する長野県域などの甕との比較については、今後の課題であろう。

G 類は、前期前葉から散見され、前期末葉には定着する。明らかに古墳時代中期の同類の平底甕に連なるものであろう。平底甕 E 類との関係など、さらに検討する必要がある。

H 類に関しては、類例が乏しく、S 字甕の変容例であることしか判らない。

I 類は、一時的、貫入的にみられるのみである。現状では、系譜・来源なども不明とせざるをえないが（恋河内 1993：51-57 頁)、「山城系」とする見方も提出されている（赤熊・福田ほか 2011：659 頁)。

平底甕に関する問題点は、以下のようになろうか。

まず第一に、第 1 図に示した平底甕 A ～ C・E 類の

大半が、丘陵部の遺跡から出土していることが問題になる。

本庄市域を例にとるなら、弥生時代後期以降、主に旧赤根川流域の児玉丘陵上および生野山丘陵、浅見山丘陵上の平坦地、緩斜面地に集落が営まれはじめる。この傾向は、弥生時代終末期にも引き継がれる[11)]。

土器に関しては、この段階まで、丘陵部での主要構成器種たる甕の主流は、平底甕A～C・E類である。

古墳時代前期にも、丘陵部では、引き続き平底甕が使われる一方、女堀川中・下流域の台地上、沖積地内の微高地上では、S字甕を中心とする台付甕が盛行し、平底甕は、F類などの一部に限られるようになる。

より細かくみるなら、古墳時代前期以降、女堀川中・下流域の台地上、沖積地内の微高地上で、平底甕C2b類などがみられるのは、中流域上部までで、中流域下部や下流域では、破片資料がわずかにみられるだけである。つまり、平底甕A～C・E類がみられるのは、女堀川中流域上部の台地上、微高地上を除けば、ほぼ旧赤根川流域の丘陵部に限定できることになる[12)]。

この平底甕の分布が丘陵部に偏る傾向は、児玉地域全体にも、おおむね当てはまるようである。

樽式・樽式系土器、赤井戸式土器、吉ヶ谷式・吉ヶ谷式系土器の問題も避けて通るわけにはいかないであろう。

まず、胴部上半全面に縄文を施文することが吉ヶ谷式の甕を規定する第一の要件である限り、平底甕C類を吉ヶ谷式土器に含めることはできない。また、輪積痕を段として残す装飾手法が、吉ヶ谷式土器の新しい段階にみられず(柿沼2015、藤野2012)、赤井戸式土器では、明確に一つの系列をなし、弥生時代終末期から古墳時代前期末葉あるいは中期初頭まで推移することが判明している(深澤1999)。

本稿の平底甕B2a類、台付甕ではあるがB2b類、平底甕B3・B4類、平底甕C類に関しては、弥生時代終末期以降、古墳時代前期後葉あるいは末葉まで存続した赤井戸式土器に含めるのが最も無理が少ないと考える。

この考え方は、児玉地域の吉ヶ谷式土器、吉ヶ谷式系土器を分析した恋河内昭彦が、逸早く本地域の同種土器を「比企・入間地方よりも、赤井戸式と呼ばれる赤城山南麓地域の土器様相に類似している」とした結論(恋河内1990：54頁)や柿沼幹夫の提案(柿沼2015：35頁)を追認するものである。

平底甕E類に関しては、弥生時代終末期、神川町前組羽倉遺跡2・3号住居跡出土例（第1図7～10）(坂本・利根川ほか1986：第29図3・4、第35図6・7)のように、樽式土器との共伴例として現れ、おそらく急速に進行したと思われる樽式の無文化の過程において発生した可能性が高い。

したがって、樽式・樽式系とするのが、系統的には妥当かもしれないが、樽式、赤井戸式は調整手法など峻別しきれない部分もあり、ひとまず古墳時代前期前葉以降に関しては、赤井戸式に随伴する甕として扱う。

b　丸底甕

丸底甕に関しては、いわゆる布留式甕と呼んでよいものがほとんどである(第2図20)。

口縁部の形態、内面のヘラケズリ、器肉の薄さなど故地の手法をかなり正確にとどめていると推定されるが、胎土材料の分析からは、いずれも在地産とされている(恋河内・藤根他2018：423-434頁)。

森岡秀人が提唱する「臨地製」(森岡2021：1・2頁)の土器に相当するのであろう。「臨地」の語には別の含意があり違和感があるが、いずれにせよ移入者あるいは移住者が故地の土器製作手法・技法を駆使して、移入先、移住先の粘土、混和材で作った土器である。

共伴関係が明確な布留式甕は、第2図20に示した久下前遺跡C3地点103号住居跡の甕(恋河内・藤根ほか2018：第124図12)のみである。破片資料であり、いささか心許ないが、古墳時代前期末葉の土器と共伴するようであり、前期の布留式甕を位置付けることのできる、ある一点が示されていると考える。

平底甕をも含め考えるなら、畿内とその周辺地域の甕に関しては、弥生時代後期後葉～終末期、古墳時代前期中葉、前期末葉、古墳時代中期前半に、間歇的にみられるとしてよいようである。

c　台付甕

台付甕には、法量の点で大型、中型、小型があるが、主に中型の甕を基準として、A～F類の6類に大きく分けることができる。

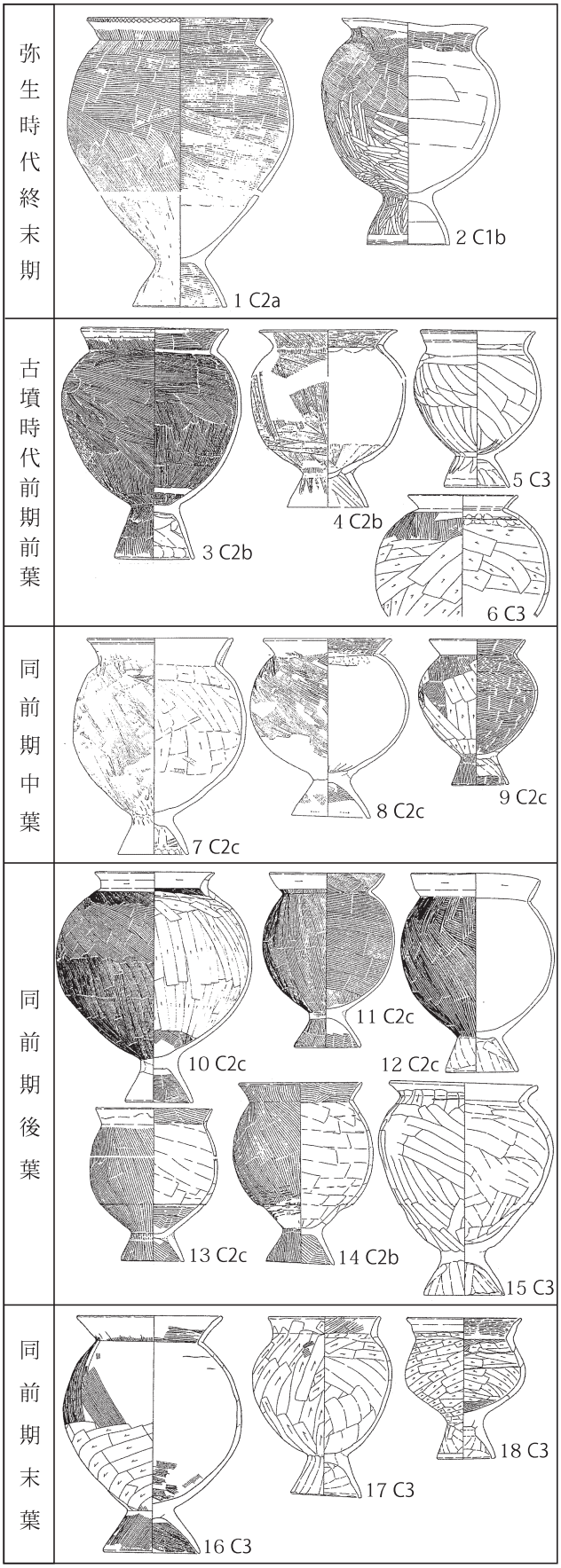
各類型の変遷については、第3・4図に示した。

A類

口縁部から胴部上位にかけ櫛描文の施された甕を、A類とする。古墳時代前期と断定できる例はみられない。

B類

口縁部から胴部上位にかけ縄文の施された甕については、平底甕の項で触れた第1図4・14などのわずかな例がみられるだけである。第1図4の甕の台部は、



第３図　台付甕Ｃ類の変遷（縮尺：１／８）

台付甕にみられない形態であり、台付甕の台部を取り入れたとも言いきれないのかもしれない。

Ｃ類

ハケ調整あるいはヘラナデ・ヘラケズリ調整の台付甕を、Ｃ類とする。「ハケ甕」というと南関東では、ハケ調整の台付甕を指し、「南関東系」と呼ばれる場合もあるが、多様である。児玉地域の一部には、このＣ類が主に出土する遺跡、遺構がみとめられる。Ｃ類は、以下のように細分することができる（第３図）。

C1a 類　Ｃ類のうち、くびれ部がゆるやかに彎曲（屈曲）し、口縁部が開く甕を、C1 類とする。C1 類の甕で、端部に刻目あるいは押捺を施すものを、C1a 類とする。

C1b 類　器形はC1a類と同じであるが、端部に刻目、押捺などの装飾を加えないもののうち、外面口縁部から胴部の調整がハケのものを、C1b 類 (第３図 2) とする。

C1c 類　口縁部外面の調整が横ナデのものを、C1c 類とする。器形、胴部外面の調整などは、C1a・C1b 類と大きく異なることはない。

C2a 類　Ｃ類のうち、くびれ部がくの字に折れ、屈折する甕を、C2 類とする。いわゆる「くの字甕」である。口縁部外面にハケを残すもの (1・3・4・14) に比べ、ナデにより無文化するもの (7 ～ 13) が新しいが、後者が相対的に新しい段階に多いとまでしかいえない。

C2 類の甕で、端部に刻目あるいは押捺を施すものを、C2a 類とする (第３図 1)。

C2b 類　C2a 類と器形や胴部の調整の特徴は同じであるが、端部に刻目、押捺などの装飾を加えないもののうち、口縁部外面にハケをとどめるものである (3・4・14)。浅見境北遺跡 44 号住居跡出土の 14 の甕 (恋河内 1997：第 276 図 1) の胴部下位には、成形・整形時のタタキメが残されている。

C2c 類　C2b 類との違いは、口縁部外面のハケの有無である。ハケのみられないものを、C2c 類とする (7 ～ 13)。くびれ部付近などに部分的にハケを残すものも本類に含める。

C2c 類の甕の口縁部外面には、時に輪積痕が残るものがみられるが、意図的かどうか判断できない例も多く、その種の例も本類に含めることにしたい。

C3 類　Ｃ類のうち、ヘラナデ・ヘラケズリ調整の甕を、C3 類とする (5・6・15 ～ 18)。器形的には、C1 類に近い例 (5)、C2 類に近い例 (15 ～ 18) がみられ、幅がある。C3 類の台付甕は、古墳時代中期前半まで残存する。

D 類

受口状の口縁部、ハケ調整を特徴とする台付甕を、D 類とする (第 4 図 1・2・4 ～ 11・19・20)。口縁部形態は、基本的に受口状であるが、端部が微妙に外向きになる例 (5 ～ 7・10) などがみられ、次に記す E 類、S 字甕への傾斜がみられる甕も、本類に含めた。

本地域での S 字甕の成立には、おそらく端部内面を強くナデ付ける手法が係っており、口縁部形態に限れば、この横ナデ手法の導入が、最終的に S 字状の口縁部形態の出現を促したと考えられる。1・2・7・10 の端部内面には、内削ぎ状の面取りがなされているが、端部の外反はみられない。胴部のハケは、おおむね右下がりの斜方向か、不定方向に加えられるようである。

くびれ部以上が分厚い作りの例 (6・10・11) が多く、内面にハケが残される例 (2・9 ～ 11) もみられる。4・7・19・20 の甕がやや薄手であるほかは、いずれも器厚が厚く、いわゆる「薄甕」ではない。

E 類

S 字甕を、E 類とする。学史的な経緯はさておき (安達・木下 1974、大参 1967・1968、田口 1981・2000、湯川・加納ほか 1981 ほか)、現状で、S 字甕の分類、編年案として最も的確と思われる赤塚次郎による分類、編年案 (赤塚 1990・1997) を参考に、以下のような細分案を示す。

細分に関しては、主に口縁部形態、外面の調整・装飾の特徴を基準とした。内面調整、とくにくびれ部内面のハケについても考慮したが (田口 1981・2000、深澤 1998 ほか)、不安定な属性らしく、不規則な現れ方をするようである [13]。

なお、ほかに S 字甕の特徴を、1 つあるいは 2 つ以上欠く変容例がみられるが、ここでは触れない [14]。

E 1 類　くびれ部以下のハケが、右下がりの斜方向のみの甕を、E1 類とする (第 4 図 3・25)。胴部上位で傾斜を違える S 字甕のハケ手法が発現する以前の調整手法が残存したものとみられる。D 類と共通したハケ調整の特徴でもある。25 の甕の端部内面には、強い横ナデによる凹線状のくぼみがみられる。

E2a 類　くびれ部から胴部上位のハケが曲線になったり、縦、斜め、横のハケが断続的に組み合わされる甕のうち、くびれ部内面に横、斜めのハケを残すものを、E2a 類とする (第 4 図 17・18)。胴部上位のハケは、同部位に櫛描文やハケを装飾的に加える手法の名残りであろう。口縁部形態も辛うじて S 字状となる。

17・18 の口縁部形態は特異ではあるが、口縁部外側に粘土を張り合わせる手法は、8 の受口甕の口縁部と似ている。なお、18 の甕は、くびれ部以下を欠いているが、一応 E2a 類の可能性があると推断した。

E2b 類　外面の調整・装飾は、E2a 類と同じであるが、くびれ部内面にハケを残さず、ヘラナデされる甕を、E2b 類とする (12・14 ～ 16)。

胴部上位のハケは、一見すると不規則にみえるが、下地の斜めハケの上から横ハケを加えるのではなく、斜め、横のハケを断続的に加えることで器面を埋めていることが判る。

口縁部形態も不安定であり、端部内面の強い横ナデ、「面取り」(赤塚 1990：67 頁ほか) がある場合には、S 字状となり (第 4 図 14 ～ 16)、ない場合には、屈曲も微弱である (同 12)。ただし、明瞭な S 字状の口縁部形態がみられることは、銘記すべきであろう。

E3a 類　外面くびれ部直下から、複帯の幅広の横ハケ [15] が加えられる甕のうち、くびれ部内面に横、斜めのハケを残すものを、E3a 類とする (第 4 図 13) (小久保・柿沼ほか 1978：第 94 図 3)。

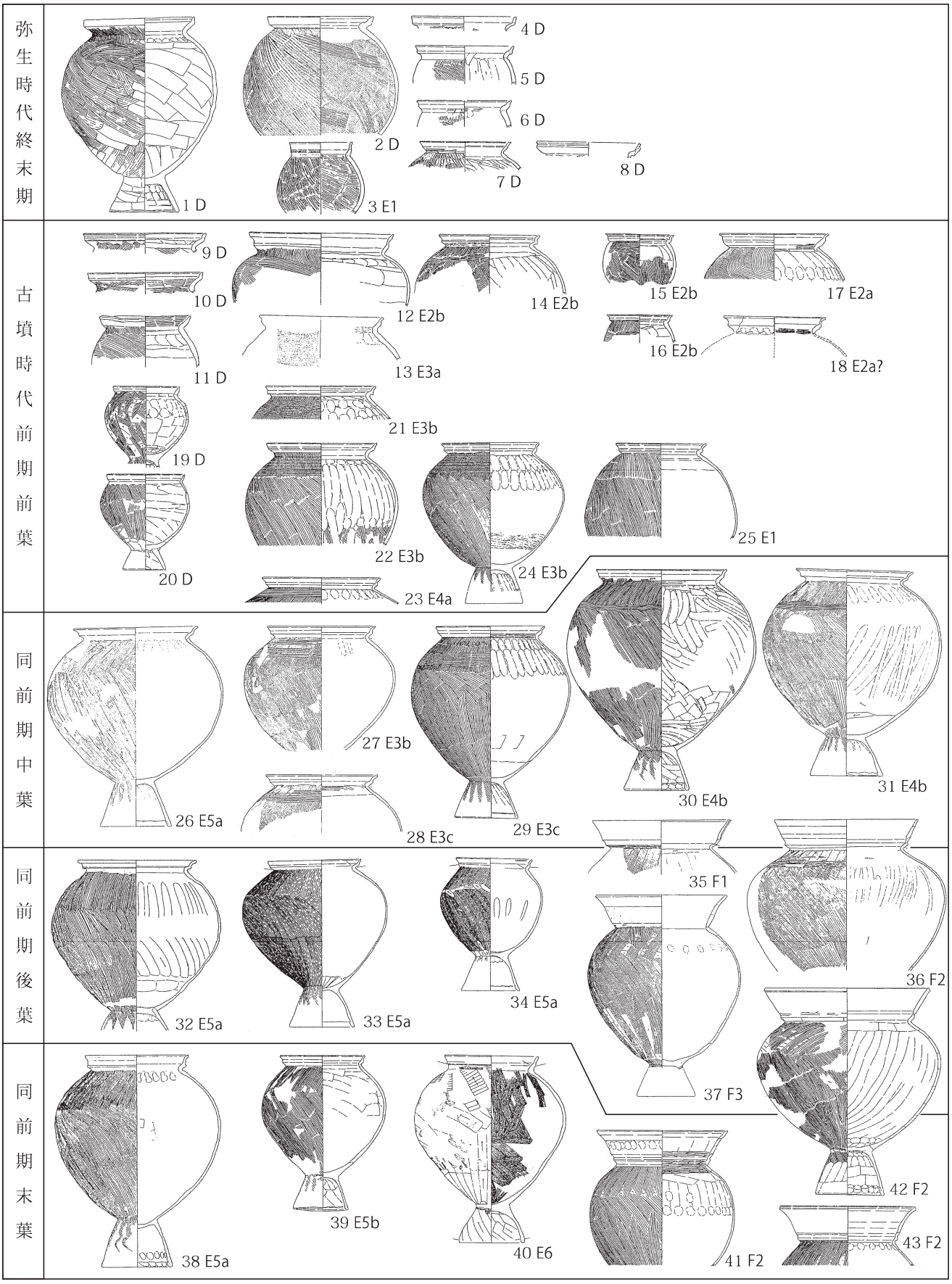
本地域では、古川端遺跡 15 号住居跡から出土した 13 の胴部上位以上の破片資料のみである。

13 の甕は、すでに指摘されているように (山川 1984：117 頁)、分厚い作りの甕であり、端部の外反が微弱で、くびれ部の内外面に直立する面をもつ独特な器形である。外面の横ハケは、密接して併走する 2 帯以上の工具による。内面の斜位のハケは、「粗いハケ」(小久保・柿沼ほか 1978：132 頁) とされ、あるいは条線の残るヘラナデ (板ナデ) 痕の一種なのかもしれない。

E3b 類　外面調整は、E3a 類とほぼ同様であるが、内面にハケがみられないものを、E3b 類とする (第 4 図 21・22・24・27)。全体に器肉が厚く、端部の屈曲が微弱で、わずかに S 字状をなす例 (21・22) から、端部の屈曲は弱いが、「薄甕」と呼びうる例 (24・27) までみられる。端部内面の横ナデあるいは「面取り」(赤塚 1990：67 頁ほか) は、24・27 の甕にみられる。

外面の横ハケの多くは、一次あるいは二次調整の縦、斜めのハケの上から加えられており、縦、横あるいは斜め、横の細かい格子目様となる。21 の甕の格子目が部分的に断続するのは、前段階の装飾的な縦、横のハケの残影であろう。21 の甕は、口縁部下段の屈曲も、突帯に近い手法で作出されており、古い特徴を残している。

全形が判る例は少ないが、胴部が球胴状に膨らむ例が多いようである。ただし、24 の甕の場合、肩 (胴部上位) がわずかながらも張り、後出する器形的特徴



第４図　台付甕Ｄ～Ｆ類の変遷（縮尺：１／８。35～37･41～43のみ縮尺：１／10）

を備えている。24 の甕の台部はかなり厚手であるが、外面には、不連続の斜めハケが加えられている。

また、胴部上位の横ハケが間隔をあけ加えられ、1 帯の横ハケのみくびれ部に接する甕 (27) も、本類に含める。この種の横ハケも、装飾的な要素を残す手法と考えられる。

E3c 類　胴部上位に複帯幅広の横ハケを加えることは、E3a・E3b 類と同様であるが、横ハケがくびれ部から離れ、下がった位置にあるものを、E3c 類とする (28・29)。28 の端部内面には、軽微ながらも横ナデが加えられている。29 のくびれ部内面には、条線の残るヘラナデ (板ナデ) が横位に加えられている。

類例は少ないが、横ハケ 2 帯が間隔をあけ加えられるものも、本類 に含める。

E4a 類　胴部上位の横ハケが 1 帯のみとなるが、くびれ部に密接して加えられるものを、E4a 類とする (23)。

E4b 類　胴部上位の横ハケが 1 帯となり、くびれ部から離れた位置に加えられるものを、E4b 類とする (30・31)。30 の甕は、胴部上位の横ハケがゆるやかな波状を呈する稀少例である。山陰の甕の影響であろうか（次山 1995）。30・31 の端部内面には、軽微ではあるが、横ナデが加えられ、面を有する。

胴部上位、いわゆる肩が張り、胴部中位以下が直線的にすぼまる、S 字甕特有の器形がみられるのは、本類と下記の E5a 類までである。

E5a 類　胴部上位の横ハケを欠き、胴部上位で方向を変えた斜めハケが、外面に加えられるものを、E5a 類とする (26・32 ～ 34・38)。本類および次に記す E5b 類の甕の多くは、口縁部の屈曲が微弱である。

E5b類　くびれ部以下の外面全面に斜めのハケが加えられることは、E5a類と同様であるが、ハケがまばらになり、部分的に下調整のケズリやナデが露出したものを、E5b類とする(39)。

E 6 類　外面調整がヘラナデやケズリの S 字甕を、E6 類とする (40)。口縁部の屈曲は、総じて微弱であり、中には、S 字状とは言いかねる甕 (40) もみられる。現状では、E6 類の甕は、共伴関係から古墳時代中期前半に下る例が多いようであるが、前期末葉以前の例もないではない [16)]。

F 類

いわゆる「山陰系口縁」（赤塚 1990）の甕、「山陰系口縁 S 字甕」（原田 1996・2000）を、F 類とする（第 4 図 35 ～ 37・41 ～ 43）。本地域では、ほとんど久下東・久下前遺跡の専有器形ともいえる甕である。大型の甕ばかりで、特定の遺跡、特定の遺構に限って出土する傾向がみられる。端部やくびれ部 (屈曲部) の形態に基づき、F1 ～ F3 類に分けることができる。

F 1 類　口縁部が外反気味に開き、端部に面をもつ F 類の甕のうち、くびれ部が L 字に屈折し、屈折部が狭いながらも水平面をなすものを、F1 類とする (35)。1 例のみではあるが (山川 1984：第 18 図)、古い段階の口縁部形態をとどめる可能性がある。

F 2 類　端部上面が強い横ナデにより凹線状にくぼみ、あるいは内外面に端部が突出し、口縁部下端からくびれ部にかけての屈曲が明瞭なものを、F2 類とする (第 4 図 36・41 ～ 43)。

F 3 類　端部上端が丸棒状で、口縁部下端の屈曲の弱いものを、F3 類とする (37)。

台付甕に関しては、樽式系、赤井戸式、あるいはその変容例である A 類、B 類、広義の「南関東系」の C 類、東海西部に淵源する D ～ F 類に大きく括ることができる。この後二者と前段で示した各種の平底甕が、地形や地勢、あるいは社会的な交流関係の網目に応じて、複雑に絡まり合い土器様相を形作っているのが、本地域の古墳時代前期の土器様相の特色である。

以下、台付甕の各類型ごとに、その推移、変遷を跡付けることにしたい。なお、A・B 類に関しては、平底甕の項で触れており、省略する。

C 類に関しては、まず弥生時代後期以来の C1a・C1b 類あるいは C2a 類が弥生時代終末期まで残存し、口縁部外面のナデ調整が浸透するとともに C1c 類が増加し、くびれ部の屈曲が強まり C2b・C2c 類が漸増し、最終的に前期中葉頃を境に、C2c 類の盛行に至るとされる編年観 (笹森 1993、杉崎 1993、横川 1982 ほか) に、大きな変更を加える必要はないと思う (第 3 図)。この過程が漸移的な過程として進行したことについては、改めて記すまでもないであろう。

古墳時代前期前葉の C 類の台付甕としては、美里町野中遺跡 1 号住居跡出土の甕が好例である (第 3 図 3・5)(宮井 2011：第 10 ～ 12 図)。

C1・C2 類の厳密な区別はむつかしいが、仮に断面図の内面に屈曲点のみられない甕を C1 類とし、屈曲点が明瞭なものを C2 類とするなら、C1b・C1c 類、C2b・C2c 類および C3 類によって占められる段階とみてよいであろう。

野中遺跡 1 号住居跡出土の C 類の台付甕の内訳を記すなら、C1b 類 3 点、C1c 類 8 点、C2b 類 4 点、C2c 類 4 点、C3 類 4 点である。C1c 類が最も多いが、外面の屈曲、屈折はどちらか迷うようなものがほとん

どである。

口縁部外面にハケが残るもの、残らないものも区々であり、くびれ部も屈折、屈曲相半ばするというのが、実状に近い。この点で、美里町志渡川遺跡３号住居跡出土の甕には、C2c 類の甕が含まれ (長瀧・中沢 2005：第 106・107 図)、問題が残る。

野中遺跡 1 号住居跡出土土器には、C3 類の台付甕が含まれることも特異である (第 3 図 5)(宮井 2011：第 12 図 55・57 ～ 59)。混入した土器とも思われず、この段階の特徴なのであろうか。屈折がより明瞭な C2c 類が確実に定着するのは、古墳時代前期中葉以降であろう (第 3 図)。

野中遺跡 1 号住居跡出土の甕全体の特異性についても、簡単に触れておきたい (宮井 2011：第 10 ～ 12 図)。それは、同住居跡出土の甕が、少数の台付甕 D･E 類を除けば、平底甕 F 類、台付甕 C1b･C1c 類、C2b・C2b 類、C3 類、「南関東系」とも呼称される甕によって占められるという点である。つまり、同住居跡出土の甕の組成は、埼玉県中央部以南の甕の組成にむしろ近く、児玉地域ではほとんどみられないものである [17]。

同遺跡では、「遺物集中区」(宮井 2011：31 ～ 44 頁) と呼称された一角からも、1 号住居跡出土土器とほぼ同じ時期の土器が多量に出土しており、甕の組成は、ほとんど変わらない。1 号住居跡出土土器の特異性は、野中遺跡そのものの特異性としてとらえることができる。

野中遺跡の甕の大半が、いわゆる「南関東系」であるのは、なぜであろう。この問題を解く鍵の一つは、野中遺跡の位置に求めることができる。野中遺跡は、児玉地域の南東端、美里町の南東端に位置する。ここは、中世の鎌倉街道上道、児玉往還上ないしはその近傍と推定される場所であり、現在の寄居町、深谷市南部を経て秩父へ、さらに荒川伝いに県央へと連なる入口にあたる。

古墳時代の道を直接知りうる手立てはないが、野中遺跡の位置は、児玉地域と外部を繋ぐ出入口のような位置にあったとまでは推定してよいかと思う。その位置的な特色が、本地域では特異な甕の組成を生み出した要因であろう。また、後述する E2b 類の S 字甕が、逸早く現れることとも無縁とは思えない。

D 類、受口口縁の台付甕に関しては、すでに指摘されているように、S 字甕の出現に先立ち、関東地方のほぼ全域にわたって分布することが判っている (及川・池田・北村 1994)。D 類の来源については「伊勢湾地域」(同上：129 頁) とされるが、不明な点が多い。

弥生時代終末期に、S 字甕の先駆けをなしたこともさることながら、本地域に関しては、S 字甕と密接な関係にあることが指摘できる。ただし、D 類自体は、時期的に弥生時代終末期から古墳時代前期前葉に限らず、時により新しい時期にも散見される [18]。

本地域の前期前葉には、D 類の台付甕は、E1 類、E2b 類、E3b 類の S 字甕と共伴し、実際口縁部の形態など、両者は峻別がむつかしい例がみられるほど類似している。端部内面を強くナデ付ける手法が導入されることで、D 類の甕が変化し S 字甕が生成したとみることもできるし、D 類とは別個に新たに S 字甕が加わったとみることもできる。

まず E 類、S 字甕に関しては、口縁部形態の変遷、時間的推移について簡単にまとめておきたい。

本地域の S 字甕の口縁部形態の変遷に関しては、これまであまり注意が払われてこなかった経緯があるが、前期後葉・末葉に口縁部の屈曲が微弱なものが目立つことを除けば、変遷を追いうる段階的な変化がみられない、見出すことができなかったことが一因している。

ただし、口縁部の屈曲の弱い E 類の甕は、仔細にみるなら、前期前葉からみられ、中葉から増加する。そして最終的に前期後葉・末葉には、ほとんどの E 類の甕の口縁部の屈曲が弱化する過程を踏むようである。

おそらく口縁部の屈曲は、前期前葉に顕在化し、前期前葉の E 類、S 字甕を特徴づける、端部内面への強いナデ、「面取り」(赤塚 1990：67 頁ほか) と連動しており、この手法が不明瞭になる前期中葉以降 (一部は、前期前葉から)、全体的に口縁部の屈曲の弱化を伴いながら、E4b 類、E5a 類、E5b 類の S 字甕が、この順に漸次入れ替わる形で推移してゆくとみられる。

規格性の弱さゆえか、前期後葉以降にも、軽微ながら端部内面に面取り様の横ナデが加えられた S 字甕が時にみられる。

次に E 類、S 字甕の器形変化について瞥見しておく。本地域の S 字甕の器形変化は、おおむね球胴状に近い前期前葉 (第 4 図 22・25) から、やや肩の張る中葉、後葉 (同図 27・29 ～ 31・33・34)、肩の張りが弱く、長胴気味になり、胴部中位以下が伸長する末葉 (同 38 ～ 40) へとたどることができる。しかしながら、各段階の器形の規格性は極めて弱く、伊勢湾地域の S 字甕 B ～ D 類のような、時期ごとの器形的特徴の推移 (赤塚 1990、早野 1999 ほか) を追うことは困難である。

器形変化に関しては、大枠としての変化の流れとして理解するのが妥当と思われる。

以下、細分したE類の類別相互の関係、それぞれの推移について略述する。

E1類の外面全面の斜めのハケは、D類あるいはC類の甕の調整手法を継承したのであろう。D類の特徴は、受口口縁だけでなく、くびれ部以上が無文で、くびれ部がくの字に屈折すること、胴部全面にハケが加えられていることにあるとすれば、D類、受口甕は、C2c類のくの字甕とも関係することが判る。上記の特徴は、ハケ調整の方向性を別にすれば、S字甕の特徴でもあり、C2c類の出現にD類、E類の甕の影響が関与している可能性を示唆する。

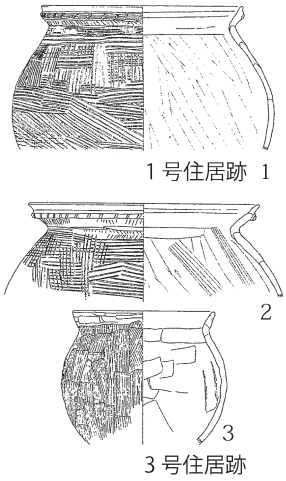
弥生時代終末期としたE1類の甕(第4図3)は、甕とすべきか迷う器形であり、問題が残る[19]。

端的に言って、今のところ本地域では、弥生時代終末期には、文字通りのS字甕はみられないとしてよいかと思う。S字状の口縁部形態が未生なだけでなく、器肉を薄く仕上げる手法もほとんどみられず、また台部外面の不連続の斜めハケや台部端内面の折返しなど、S字甕を構成する特徴のほぼすべてが定着する以前の段階と考えられる。

古墳時代前期前葉の台付甕E類、S字甕については、E2b類を主とする一群(第4図12・14～16)とE1類(25)、E3b類(21・22・24)を主とする一群の2つに大きく分けられる。

前者は、D類の比率が高く、後者では、D類は小型甕に限られるようであり、仮に前後に配した。E類に関しては、E2類とE3類は、系統が異なると考えられ、直接先後の関係を決めることができないが、E3b類とした甕には、口縁部形態や肩の張りに後出する特徴を備える甕もみられ(第4図24・27)、ある時間幅が予想される。前期前葉の細分については、さらに資料が充実した段階に、改めて考えるべきであろう。

E2類、とくにE2b類は、先に胴部上半を断続的に斜め、横のハケで埋める調整・装飾手法であると記した。この手法を考える手掛かりとして、地域は異なるが、北本市八重塚遺跡1・3号住居跡出土の甕を例示しておく(第5図)(磯野・新井1994:第32図2・4・5)。



第5図

2点の甕(第5図1・2)は、「いわゆるS字状口縁の祖型とされるものに近似」(同上:145頁)するとされ、外面口縁部中位に突帯状の貼り付けがなされ、刻目が加えられている。2の甕の口縁部形態は、強いて分ければ、受口状に近く、どちらもS字状とは到底いえない形態である。胴部上位には、縦、横の粗いハケが、断続的に、網代編みのように加えられている。「薄甕」ではない。1・2の甕の内面に横ハケがみられないことも留意すべき点である。

報告者が指摘するように「欠山式においても古相」(同上)の甕とみることもできる。胴部上位に縦、斜めのハケに重ねて横ハケを加える手法の変容例とみられる[20]。

おそらくこの種の変容の著しい調整・装飾手法を介してのみ、さらに変容を遂げたE2b類の胴部上位の特異なハケは、説明できるように思われる。胴部の調整・装飾手法に限れば、ハケの走向が奔放なまでに変容している点で、荒川下流域や東京低地とその周辺のS字甕(牛山1998)の一部に類似するようにみえる。

また、E2b類の甕の多くが、端部内面への強い横ナデ、「面取り」(赤塚1990:67頁ほか)により端部が外反することも(第4図14～16)、際立った特徴である。

この端部内面の「面取り」(赤塚1990:同上)は、赤塚のS字甕B類の特徴とされ、S字甕C類にはみられないとされている(同)[21]。E2b類の段階が、赤塚のS字甕B類の段階と併行することを示す証左であろう。

E2b類に関しては、今のところ美里町野中遺跡から出土しているのみであり(第4図12・14～16)(宮井2011)、また、ほとんどが残存率の低い破片資料であるため、これ以上の検討はむつかしい。

一つだけ付け加えるなら、野中遺跡では、口縁部片には、明らかにE2b類、S字甕の特徴を備えた個体がみられるにもかかわらず、甕台部片(口縁部片とは別個体とされている)には、S字甕に特有の外面の不連続斜めハケかと思われるハケが少数の台部片(宮井2011:第12図ほか)[22]にみられるのみであり、台部内面端の折返しがみられる個体は1点も出土していないようである。

台部外面の不連続斜めハケは、S字甕A類の段階から下端鋸歯状のハケなどの形でみられるようであるが、台部内面端の折返しは「5期[廻間Ⅱ式1・2段階]から明瞭化する」(赤塚1990:67頁)とされ、また、

西上免遺跡の報告書でも同様の位置付けが述べられている（赤塚 1997：84 頁）。

上記した甕台部にみられる特徴は、野中遺跡出土土器、とくに E2b 類の S 字甕が、廻間Ⅱ式 1・2 段階のある時点と接点をもつことを間接的に示していると考えられる。この推定に加えて、野中遺跡出土土器には S 字甕 A 類がみられず、端部内面の強い横ナデが顕著であることを考慮するなら、同遺跡出土土器は、廻間Ⅱ式 2 段階に併行する可能性が高いと考えることができる。

次に記す E3b 類の甕に関しては、資料的に充実していないため、S 字甕に特有のこの種の台部の手法の有無を確定することができない。

E3b 類に関しては、第 4 図に示した久下前遺跡 C3 地点 105 号住居跡出土土器（第 4 図 21)（恋河内・藤根ほか 2018：第 127 図 2)、久下東遺跡 H 地点 383 号住居跡出土土器（第 4 図 22)（恋河内・藤根ほか 2019：第 241 図 4)、浅見境北遺跡 16 号住居跡出土土器（第 4 図 24)（恋河内 1997：第 219 図 3)、社具路遺跡 4 号土坑出土土器（第 4 図 27)（長谷川・石橋・山川ほか 1987b：第 168 図 5）[23] のほかに、久下東・久下前遺跡の複数の地点の遺構や河川跡から出土している。

久下前遺跡では、C4 地点の河川跡に廃棄された土器中に、E3b 類の台付甕が目立つ（恋河内・藤根ほか 2018：第 320 ～ 327 図）。C4 地点の河川跡は、古墳時代前期前葉・中葉、古墳時代中期の土器を主とし、前期末葉の土器を少量含む、器物廃棄の場と化した埋没小河川跡である。

久下東遺跡 G2 地点 221 号住居跡出土の 1 点（恋河内・藤根ほか 2019：第 7 図 7）が、前期中葉に残存した E3b 類の S 字甕の可能性がある以外は、散発的な出土状態であり（恋河内 2010：第 118 図 64、松本 2013：第 81 図 50・54・55 ほか）、共伴する土器を検討することができない。

E2b 類から E3b 類が派生したとは考えにくいから、何らかの影響により、E3b 類は新たに生み出されたと推定するのが、現状では至当と思われる。

E3b 類の甕には、端部内面に強い横ナデが加えられるものが含まれる（第 3 図 24・27）ことは注意してよい。

E3c 類は類例が少なく、川越田遺跡 C 地点黒色土出土土器（恋河内 1993：第 40 図 8)1 点、浅見境北遺跡 3・31 号住居跡出土土器（第 4 図 29)（恋河内 1997：第 193 図 15、第 250 図 1）の 2 点および社具路遺跡 4 号土坑出土土器（第 4 図 28)（長谷川・石橋・山川ほか 1987b:第 169 図 5・7)1 点の 4 点を掲げうるのみである。

浅見境北遺跡で、E3b 類が出土しているにも拘らず E3c 類と共伴する例がみられないという事由および外面胴部上位の横ハケがくびれ部から離脱することを重視して（赤塚 1990・1997）、E3b 類→ E3c 類の変化をみとめ、時期を異にすると推定した。

E4a 類も類例が少ない。雷電下遺跡 D 地点埋没河川出土土器（第 4 図 23)（恋河内 1999：第 87 図 77・78）の 2 点のみである。この場合も、胴部上位の横ハケがくびれ部に密接していることを基準に、暫定的に古墳時代前期前葉に含める。

古墳時代前期中葉に E4b 類が盛行することは間違いないが、E5a 類も併存するようである。社具路遺跡 4 号土坑出土土器（第 4 図 26 ～ 28・31)（長谷川・石橋・山川ほか 1987b：第 167 ～ 170 図）は、古墳時代前期中葉の土器様相を示す好例である。長軸長が 3.3m、深さ 80㎝ほどの長楕円形の土坑の上層からまとまって出土した一括性の高い資料である。

台付甕は 11 点出土しており、内訳は、C2c 類 2 点、E3b 類 1 点、E3c 類 1 点、E4b 類 4 点、E5a 類 3 点である。ほぼ完形の甕を含む台付甕 C2c・E4b・E5a 類に比べ、台付甕 E3b・E3c 類の 2 点は、残存率が低いという違いがみとめられる。あるいは来歴を異にする可能性もあるが、土坑内の一括資料であり、共伴例として差し支えないと思う。社具路遺跡 4 号土坑出土土器は、甕、とくに台付甕からみて、前期中葉の古い段階の特徴をもつ土器群であろう。

この位置付けに誤りなければ、台付甕 E5a 類は、前期中葉の古い段階あるいは当初から出現したと推定できる。ただし、E5a 類がどの段階からみられるのか、という問題に対しては、今のところ前期中葉を遡る例はみられないと答えるほかない。

E4b 類、E5a 類が併存しながら、次第に E5a 類が E4b 類に取って替ったというのが、前期中葉から後葉にかけての変化と考えられる。この過程を詳らかにしえないのは、E4b 類、E5a 類の交替が、比較的迅速に進行したからであろう。

前期中葉、後葉の区分は、基本的に台付甕 E4b 類の有無により判定すべきと考えるが、点数の少ない遺構出土土器などの場合、他器種の形態、特徴を加味して総合的に決める必要がある。また、小型の台付甕ではあるが、胴部上位の横ハケが切れ切れとなり、明らかに形骸化しており、前期後葉に含めてよい E4b 類の例（松本・大熊ほか 2009：第 63 図 1）もみられる。この場合も、やはり出土状態や残存率などを含め、共伴した他器種の様相をも考慮して判断することになる。

E5b 類は、外面のハケ調整の粗略化により生じた一次整形・調整のケズリの露出を特徴とする (第 4 図 39)。古墳時代前期末葉に目立つようであり、口縁部の屈曲の弱化、胴部全体の伸長傾向と軌を一にするようである。

E5a 類→ E5b 類の推移がみとめられるにしても、それは E5b 類が前期末葉に相対的に増えるということに過ぎない。前期後葉、末葉の区分は、別の基準に拠るべきである。

E6 類は、古墳時代中期前半に散見される。前期では、小型・中型が多く、また台付甕、平底甕どちらか迷うような器形の甕もみられる。

E 類、 S 字甕について簡単にまとめるなら、以下のようになろうか。

本項では、赤塚分類および編年 (赤塚 1990・1997) を参考に、本地域のS字甕の分類および編年について略述した。大枠での変遷は、赤塚分類とその編年案に沿うものとなったが、相違点のいくつかが明かになったと思う。

まず、本地域でのS字甕の出現段階にみられる E1 類、E2a・E2b 類、E3a・E3b 類に関しては、E1 類、E2 類は、赤塚分類 (同) にみられない類型であり、簡単に触れた系統関係からも、赤塚の拠って立つ伊勢湾地域、とくに濃尾平野低地部のS字甕とは、別系統と考えられる。

E3a・E3b 類は、外面の横ハケがくびれ部から離脱していない点で、赤塚のS字甕 B 類 (同) に近いといえるが、端部の内面からのナデが弱く、 S字状の屈曲が微弱なものがみられること、外面の幅広の横ハケの条間が広く浅いことで、下地の縦ハケが浮き出て格子状をなす装飾性に富むものが多いこと、内面くびれ部に横ハケを残すものが少ないこと、器厚の厚いものが含まれること、などの違いが指摘できる。

これらの相違点は、地域的な変容、変異であるといってしまえばそれまでであるが、本地域のS字甕の出現段階から種々の変容が起っていること、ある時間的な経過が含まれる可能性が示唆されていることには注意すべきである。

E3b 類に関しては、今一つの問題がある。E3b 類が、伊勢湾地域以東の地域では、極めて限られるという問題 [24] である。

この問題に即答することはできないが、一つの見通しだけ記しておきたい。 S字甕の変遷を通観すると、 S字甕の諸要素の確立以降は、その変化の多くは、器形変化、形態変化を除くと、様々な要素が脱落する過程である。この脱落の過程に、ある脱落はある段階に、ある脱落は他の脱落とともに、あるいは様々な遅速を伴って脱落が起こる、そうした地域差があっても不思議ではない。

伊勢湾地域では、口縁部外面の押引刺突文あるいは刺突文の脱落と外面の横ハケのくびれ部からの離脱に時間差があるとされているが (赤塚 1990：110-114 頁、同 1997：79-95 頁)、この変化が同時に起っている地域があるのであろう。というより、東日本の広範囲にわたる地域で、この変化が同時に発生している可能性がある [25]。

極めて図式的な理解ではあるが、赤塚の廻間Ⅱ式 1 段階と同 2 段階のS字甕の違いは、 S字甕 A 類が残存するか否か、口縁部外面の刺突文の有無に、廻間Ⅱ式 2 段階と同 3 段階のS字甕の違いは、外面胴部上位の横ハケのくびれ部からの離脱の有無が一つの基準とされている。つまり、口縁部外面の刺突文の脱落、すなわちS字甕 A 類の消滅と外面胴部上位の横ハケのくびれ部からの離脱が同時に進行した場合、 S字甕 A 類が終息すると同時に、横ハケがくびれ部から離脱した甕が出現することになる。外面の調整・装飾に関する限り、赤塚の廻間Ⅱ式 2 段階に相当するS字甕は、存在しなくなり、別の軌道をたどる変化が進行することになる。

E3b 類が本地域の一部にみられることには、いくつかの推定が可能である。最も単純な推定としては、E3b 類に類似したS字甕が一時期あるいは一段階をなす地域からの直接の影響を想定する考えである。現状では、伊勢湾地域、とくに濃尾平野低地部からの直接の影響を考えることになるが [26]、先に記した本稿 E3b 類のS字甕と赤塚の B 類のS字甕との違いからは、やはりこの考えには躊躇せざるをえない。

変容が確実に進んでおり、外面の装飾的なハケの特徴などからみて、濃尾平野低地部からの直接的な影響を考えるよりも、二次的な中継地点を経ているとする見方が、今のところ穏当であろう。「中継地点」は不明とするほかない。

この問題に関連して、 S字甕の地域性、「地域型」の問題 (加納 1998・2000、原田 1996・2000 ほか) も避けて通れない。

S字甕の広範な分布圏全体を細部にわたって議論することなど到底できないが、S字甕の地域性の設定に関して、加納俊介が記した「濃尾平野のS字甕との相違だけではなくて、地域相互の違いもちゃんと説明しなければ、説得力に欠けるし、いたずらに混乱を招くのではないか」（加納 1998：106 頁）との警告、原田幹が「伊勢湾地域」、「駿河地域」、「甲斐地域」、「群馬県地域」

のS字甕を比較した後に記した「駿河地域、甲斐地域、群馬県地域におけるC類並行段階以降のS字甕の変化にはかなり共通する点も認めなければならない」(原田2000：74頁)とする発言には、傾聴すべき点があると思う。

先に触れたように、S字甕の変遷の多くは、様々な特徴の脱落にあり、その脱落の時期の遅速と付随する変容に、地域的特色を生む根があると考えられる。おそらくS字甕という大枠を共有しながら、器形や成形手法、整形・調整手法、装飾の一部を共有し、一部を異にする、類似と差異が入り組む「家族的類似性」のような関係で結ばれた土器の空間的な広がりが、S字甕の広域な分布圏なのであろう。

S字甕の地域型については、地域型設定の方法の問題をはじめとして、時期限定の問題、地域型相互の同異点の問題など、いずれより踏み込んだ議論が必要になると考える。

地域型の問題に関連して、本稿E3c類、E4b類と赤塚のS字甕C類(赤塚190・1997)との相違点にも触れておく必要があるであろう。赤塚のS字甕C類の特徴とされる「頸部調整技法」(赤塚1990：54・60頁ほか)、くびれ部の屈曲が強まることに随伴して生じた、くびれ部外面に沈線を加える調整手法が、本地域のE3c類、E4b類のS字甕にはみられないことが指摘できる。

また、前期中葉以降、E3c類、E4b類とともにE5a類とした外面斜めハケだけのS字甕がみられることも、赤塚が組み立てたS字甕の変遷過程(同)との大きな違いになる。この相違点は、伊勢湾地域以東の東日本各地で繰り返し指摘されてきた違いであり(加納1990・1998、原田1996・2000ほか)、問題が大きい。

端的に言って、前期中葉以降は、赤塚分類および赤塚編年(赤塚1990・1997)を、そのまま本地域に適用することは、むつかしいと考えられる。遺跡単位や地域単位で甕以外の器種を含めた緻密な編年を組み立て、それぞれの比較から整合性を図る以外手立てはないように思われる。

ただし、地域性を強調し過ぎるのもあまり賢明ではないのかもしれない。S字甕という特有の甕がかくまで広域に分布し、大枠での変化の軌道が共有されていることは否定できない。

他地域との併行関係については、甕以外の器種の編年を組み立てた後に、より細かな対比を経て、議論するつもりであるが、甕、とくにS字甕の変遷は、併行関係を考えるための一つの柱であるから、ここでS字甕を介した併行関係についての予察を書き留めておくことは、以降の議論の枠組みをあらかじめ示す意味でも無意味ではないと思う。

まず古墳時代前期前葉とした段階に関しては、赤塚のS字甕A類がみられないことから、廻間Ⅱ式2段階以降に併行することは間違いない(赤塚1990・1997)。赤塚分類、編年をさらに援用するなら、廻間Ⅱ式3段階以降、外面胴部上位の横ハケがくびれ部から離脱するとされているが、廻間Ⅱ式3段階の中に離脱が完了する段階があるらしく(赤塚1997：表2)、廻間Ⅱ式3段階を含め併行関係を考えておく。つまり、本稿で古墳時代前期前葉とした段階は、赤塚の設定した「廻間Ⅱ式2・3段階」(赤塚1990・1997)に併行するとみられる。この点に関しては、先に記した台付甕E2b類の口縁部形態、台部の特徴(本稿：13・14頁)も参考になると思われる。

前期中葉・後葉に関しては、S字甕だけでは併行関係を推し測ることができない。前期末葉に関しては、柱状脚の高坏、鉢・埦の多出などからみて、赤塚の「松河戸Ⅰ式」の前半(赤塚1994、赤塚・早野2001)に併行することは明らかであるから、前期中葉・後葉は、廻間Ⅱ式4段階と廻間Ⅲ式4段階の間で案分するのが次善の策である。

しかしながら、ごく感覚的ではあるが、資料の多寡からみて、前期中葉が前期後葉と同様の時間幅を有するとは思えない点を加味し、暫定的に前期中葉を、廻間Ⅱ式4段階から廻間Ⅲ式1段階まで、前期後葉は、廻間Ⅲ式2段階から廻間Ⅲ式4段階までと割り振ることにしたい。

加納俊介の編年案(加納1991)との併行関係に関しては、細部の違いをひとまず置くなら、本稿で古墳時代前期前葉とした段階が、加納の「廻間期」に、前期中葉・後葉が同「塔の越期」に、前期末葉が同「西北出期」におおむね併行するとみることができる。

F類については、出土例に乏しく、明確な位置付けがむつかしいが、わずかな出土例からも極めて偏った出土傾向の一端をうかがうことができる。

本地域でF類の台付甕が出土した遺跡は、今のところ後張遺跡(増田・立石1982a・b)、久下東・久下前遺跡(恋河内・的野2010ほか)、東牧西分遺跡(恋河内1995)、美里町日の森遺跡(菅谷1978、山川1984)の4遺跡である。この一事からも、まず遺跡を単位として、F類の台付甕が偏在する傾向が顕著であることが判る。

このうち後張遺跡では、A区140号住居跡から口縁部下半からくびれ部にかけての小破片が1点(増田・立石1982b: 第120図5)、東牧西分遺跡では、A地点

20 号住居跡から台部の接合部以上がほぼ完形の F3 類の甕が 1 点 (第 4 図 37)(恋河内 1995：第 117 図 6) 出土したにとどまる。

日の森遺跡は概報が出ているのみで検討できないが、久下東・久下前遺跡では、口縁部片が多いが、河川跡を中心に F 類の甕がかなりの点数出土している[27]。現状では、日の森遺跡を除いて、本地域内で F 類の甕が多数出土した唯一の遺跡といってよい。

後張遺跡 A 区は、古墳時代前期後葉～末葉の規模の大きな集落跡であり、久下東・久下前遺跡の古墳時代前期の集落と確実に併存した時期を含む遺跡である。しかも両遺跡は、直線距離で 1.8㎞ほどしか離れていない。F 類の甕の多寡にみられる違いが、両遺跡の土器様相の違いの一側面を表すことは間違いない。

久下東・久下前遺跡では、久下前遺跡 C3 地点 103 号住居跡出土の 1 点 (本稿：第 4 図 41、恋河内・藤根ほか 2018：第 124 図　7) を除き、F 類の甕がいずれも河川跡から出土していることも注意すべきであろう。F 類の甕が皆超大型といってよいような規格外の法量であることと相俟って、何かしら河川跡と関連する特殊な用途をもつ土器であることを強く示唆する。

日の森遺跡で報告された 2 点の F 類の甕 (第 4 図 35・36)(山川 1984：第 18 図) が、ともに「第 1 溝」と呼ばれた「排水路」(菅谷 1978：18 頁) と推定される溝跡から出土していることも、同じような脈絡でとらえられる可能性がある。

台付甕 F 類、「山陰系口縁 S 字甕」の変遷に関しては、原田幹が示した編年案 (原田 2000) があるが、相違点が多々あるため、F1 ～ F3 類の細分に沿って考えてみたい。

F 類の台付甕の変遷を、第 4 図右下に示した。第 4 図 35 の F1 類は、原田の「1 類」(原田 2000：76 頁) に近いが、くびれ部から口縁部にかけての屈折部の水平面が微弱であり、端部の形態などにも違いがみとめられる。原田の「1 類」は、「山陰系口縁 S 字甕」の出現段階の甕とされているが、同じように F1 類を古く位置付けるのは無理である。前期中葉から後葉にかけての位置付けが無難なところである。

36 の F2 類の甕の胴部上位には、E4b 類の S 字甕と共通する横ハケが加えられている。横ハケは断続するらしく、横ハケの形骸化が進んだ段階の所産とみられる。やはり前期中葉、後葉微妙な段階の土器であろう。本地域では、共伴関係から前期中葉以前に遡ることが確実な F 類の甕の出土例はみられないことからも、36 の甕も、35 の甕と同様の位置付けを与えておく。

42 の F2 類の甕は、器形的にみて、より古い段階の可能性もないではないが、古墳時代前期の出土土器がほぼ前期後葉、末葉にしぼられる久下前遺跡 G 地点の河川跡から出土しており、前期後葉ないしは末葉とみるのが穏当である。37 の F3 類の甕および 41 の F2 類の甕は、共伴する土器からみて、前者は前期後葉、後者は前期末葉とみられる。37 の甕は、在来化のとりわけ著しい例である。

製作手法的な巧拙からみて、F2 類→ F3 類の変化が考えやすいが、現状では、出土資料によって、この推移の過程を裏付けることができない。

台付甕ではないが、F 類の末裔と考えられる甕が、古墳時代中期前半までみられる[28]。F 類の甕が決して偶発的、単発的に出現、定着したものではないことを示している。

註

1）　現在女堀川は、上武山地に端を発し、本庄市域の中央を東流あるいは北東流し、本庄市、深谷市の境付近で、小山川と合流する、狭長な流域を有する河川である。

現在の女堀川上流域は、河川改修により、旧赤根川を取り込んだ部分にあたり、本来の女堀川は、児玉丘陵奥部の金屋地内に水源をもつ河川であった。本稿では、該期の遺跡が集中する旧赤根川流域の丘陵上などの遺跡をあつかう場合、「旧赤根川」の呼称を用いて説明する。

「女堀川上流域」に関しては、旧女堀川が丘陵部を流れるごく狭い範囲に限定する。また、適当な用語が見当たらないため、暫定的に後張遺跡などの該期の諸遺跡が集中する範囲から上流域までを「中流域上部」、より下流の久下東・久下前遺跡などの諸遺跡の集中する範囲を「中流域下部」、女堀川と小山川が接近し、両河川間を流れる男堀川が小山川と合流するあたりより下流を「下流域」と仮称する。

「中流域上部」が相対的にかなり広い範囲となるが、この間の沖積地中の微高地上や自然堤防上などに点在する遺跡を適切に区分することがむつかしいことに起因する。丘陵上の墓域との関係からも、いずれ「中流域上部」が、2 つないしは、それ以上の領域に区分できるという見通しがあることを記しておく。

2）　児玉地域、とくに本庄市域は、これまで古墳時代前期、東日本における S 字甕の中心的な分布域である群馬県域に分布する「石田川式」の分布圏として論じられもした経緯がある (増田・柿沼・小久保ほか 1979 ほか)。本稿は、群馬県域の古墳時代前期土器の研究成果のみならず、東海西部あるいは東部の土

器研究の蓄積にも多くを負っているが、それについては、折に触れ記すことにしたい。

3)　弥生時代終末期に関しては、美里町志渡川遺跡3号住居跡出土土器(長滝・中沢2005：第104～109図)を好例として、平底甕に関しても、北陸南西部の月影式の甕、北陸北東部の千種式の甕、いわゆる近江系の甕など極めて多様な様相がみられる場合がある。

本稿では、ひとまず古墳時代前期に関連する平底甕に限り取り上げる。なお、弥生時代終末期の土器様相については、弥生時代後期の土器を含めて、改めて論じる機会があるかと思う。

4)　遺構名や挿図の名称に関しては、報告書ごとに様々なため、例えば住居跡に関しては「1号住居跡」、挿図では「第1図1」といった表記に統一して引用する。また、本庄市以外の遺跡を記す場合にのみ、市町名を記すことにしたい。

5)　「吉ヶ谷式系土器」、「吉ヶ谷系土器」に関しては、柿沼幹夫が「吉ヶ谷式土器と同時期における空間的系統」(柿沼2015：38頁)を「吉ヶ谷式系」、「縦の時間的系統」(同上)を「吉ヶ谷系」と区別することを提唱している。

柿沼が提案する区別の必要性には賛同するが、当面柿沼の「吉ヶ谷系」のみに論点をしぼる都合上、また若狭徹が主唱する「樽式系土器」(若狭1990)を強いて変更する理由もないことから、本稿で示す「古墳時代前期前葉」以降の樽式土器、吉ヶ谷式土器を、「樽式系土器」、「吉ヶ谷式系土器」と仮称する。ただし、後述するように、吉ヶ谷式系土器は、壺などの一部を除いて、児玉地域では確認することができない。

6)　「赤井戸式」(小島1983、深沢1999、柿沼2016)の問題もからみ、とくにC・D類に関しては、どのような系統の土器なのか、議論が分かれる。この問題に関しては、後述する。

7)　本地域では、A類の甕とS字甕の同一遺構での出土例は、台付甕ではあるが、樽式系の櫛描文台付甕とS字甕脚部片が出土した飯倉南部遺跡群神明前遺跡1区1号住居跡出土例(有山・高橋2011：第37図5)1例のみである。

後段で触れる久下前遺跡C3地点105号住居跡(恋河内・藤根ほか2018)で、古墳時代前期前葉のS字甕と樽式系の櫛描文壺の共伴例があることから(同上：第127図)、樽式系の櫛描文が前期前葉まで残存することは確実であるが、神明前遺跡1号住居跡出土のS字甕脚部片は、やはり混入した遺物とみるのが無難である。

因みに児玉地域では、堆積過程がゆるやかな所為か雷電下遺跡A地点25号住居跡出土土器を好例として(横川・増田・駒宮1979)、廃絶した住居に、集積されたり、散在した遺物がまとめて廃棄された結果、古墳時代前・中期、あるいは前期から後期の土器が混在して出土する例がしばしばみられる。

8)　B類が新しい段階まで、残存する可能性を示唆する資料としては、神川町青柳古墳群海老ヶ久保支群10号墳墳丘下2号住居跡出土土器(田村・金子1997：第92～95図)を掲げることができる。

同住居跡出土土器の場合、破片資料が多く、前期前葉かと思われるC類の平底甕口縁部片、B4類の平底甕、前期中葉・後葉のS字甕、S字状口縁の鉢、口縁部の長い平底の鉢や高坏、器台に加え、古墳時代後期の長甕、坏などが出土しており、時期ごとに選り分けることは容易ではない。

9)　梅沢遺跡C地点30号住居跡出土のミガキ調整の平底甕(恋河内1995：第50図7)など、該期の平底甕の系統に連なる疑いのある平底甕が、中期前半には時にみられる。

10)　C1類の平底甕とS字甕が同じ遺構から出土した例としては、長沖古墳群久保地区D地点4号住居跡出土のS字甕脚部片(大塚2014：第22図8)を掲げることができる。脚部端内面の折返しが微弱であり、多少問題も残るが、同住居跡では覆土中からより新しい段階のS字甕破片が出土しており(同：第23図17～22)、脚部片も混入した遺物と考えられる。なお、同住居跡から出土したC1類の平底甕は、第1図5の甕である。

11)　女堀川中流域下部では、弥生時代終末期にもわずかではあるが、平底甕を主とする集団の居住域が丘陵部から離れ、台地に降りる傾向がみとめられる。

浅見山丘陵の北側の台地あるいは微高地上の山根遺跡30号住居跡からは、弥生時代終末期と思われる櫛描文の施された壺などが出土しており(増田1990)、また女堀川右岸の台地上の久下東・久下前遺跡でも、久下東遺跡G2地点291号住居跡(恋河内・藤根ほか2019)、久下前遺跡G地点209号住居跡(恋河内・藤根ほか2020)、北堀新田前遺跡A2地点7号住居跡(松本ほか2015)の3軒が弥生時代終末期の住居跡である。

また、久下前遺跡G地点221号住居跡(恋河内・藤根ほか2020)も、平面形、炉跡などから弥生時代終末期の可能性のある住居跡である。

12)　旧赤根川流域の丘陵部でも、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて、丘陵上だけでなく、低地内の微高地上や自然堤防上に進出する集落もみられる。ミカド遺跡(坂本・鈴木1981、大熊・和久2010)、ミカド西遺跡(同)、田端南堂遺跡(大熊・和久2010)がその種の遺跡である(恋河内・藤根ほか2018：462頁)。

資料が限られるが、田端南堂遺跡を例にとるなら（同上）、それらの遺跡では、平底甕C類と変容の著しいS字甕、器台、赤井戸式の甑などが共伴するなど、独特の土器様相がみられるようである。

13）　確かに台付甕D・E類の古い段階に多いようであるが、社具路遺跡4号土坑出土土器（第4図28)（長谷川・石橋・山川ほか1987b：第168図7）や久下東遺跡H地点326号住居跡出土土器（恋河内ほか2019：第137図20）のように、S字甕の新しい段階にもみられないではない。また、本地域では、内面横、斜めのハケのあるS字甕のみで占められる一括資料は1例もない。

14）　どこまでを変容例とみるかにもよるが、加納俊介が指摘し、問題視した「S字甕もどき」（加納1990)、変容例も多々みられるが、それらについては、他日を期すことにしたい。

なお、山川守男が分類した「Ⅷ類」（山川1984：117頁）、口縁部がS字状を呈さず、台部端内面に折返しをもつナデ、ケズリの甕は、一部の例外を除いて、古墳時代中期前半を中心とする時期に目立つようである（恋河内2008：199-200頁、第189図）。

15）　「外面の横ハケ」に関しては、器面調整のハケとは異なる工具による可能性があるものが、とくに古い段階に多いようである。ただし、慣用に従い、そうした例を含め、「横ハケ」という呼称を用いる。

16）　久下東遺跡G2地点262号住居跡からは、胴部下半以下を欠くE6類のS字甕が出土している（恋河内・藤根ほか2019：第29図2)。頸部以下を欠く壺（同：第29図1）と組み合わされていたと推定されており、報告者は、内外面ナデ調整の特異性から鉢として報告している（恋河内ほか2019：35頁）。共伴する小型のS字甕からみて、古墳時代前期中葉と考えられる。

17）　改めて記すまでもないことであるが、児玉地域では、古墳時代前期以降、台付甕E類、S字甕が組成の中心をなす。ただし、平底甕F類や「南関東系」とも呼称される台付甕C類が、遺構単位で卓越する古墳時代前期の例もないわけではない。

管見に触れえた限りではあるが、生野山古墳群78号墓下1号住居跡出土土器（山川1984：第4図）、東牧西分遺跡A地点20・39号住居跡出土土器（恋河内1995: 第116～118・156・157図）、同遺跡C地点13号土坑出土土器（同：第181図）、塔頭遺跡1号住居跡出土土器（岩瀬1998：第31図）、東五十子遺跡1号住居跡出土土器（太田2002: 第322図）などの諸例を掲げることができる。

また、弥生時代終末期のミカド西遺跡3号住居跡出土土器（大熊・和久2010：第5図8・9)、塩谷下大塚遺跡C地点5号方形周溝墓出土土器（恋河内1990：第12・13図）も、台付甕C類が主となる稀少な例である。

東牧西分遺跡、生野山遺跡、塔頭遺跡の一部の住居跡を例外として、女堀川中流域の遺跡の大半は、少なくとも台付甕C類を主とする遺跡ではない。また、野中遺跡を例外として、児玉地域の該期集落遺跡のうちで、遺跡単位で台付甕C類を主とする遺跡は、ほとんどみられないとまではいえるかと思う。

18）　地域を異にするが、深谷市水窪遺跡4号住居跡出土の受口の台付甕（栗原・佐藤1974：第16図3）は、前期中葉以降にD類の甕が残存することがあることを示している。さらに後張遺跡C地点214号住居跡出土の受口、ヘラナデの台付甕（恋河内2005：第71図3）のように、例数はごく限られるが、前期末葉～中期前半にまで残存する例もみられる。

19）　第4図3の小型甕（長滝・中沢2005：第106図29）に器形のよく似た、法量の近い「小型壺」（瓢形壺の一種か）が、他遺跡例ではあるが、同じ報告書中の南志渡川遺跡4号墓出土土器中にみられる（同書：第41図7)。内外面のハケ調整からみて、第4図3の土器が小型甕である可能性は残るが、かすかにS字状に屈曲する口縁部を過大に評価することはできない。

20）　八重塚遺跡出土土器の類例としては、山梨県甲府市米倉山B遺跡8号住居跡出土土器（坂本1999：図版91・92）を掲げることができる。

同住居跡出土の甕は、倒卵形に近い器形で、くびれ部に密接して複帯の横ハケが施されており、口縁部は、八重塚遺跡の甕同様に受口状に近い。胴部上位の横ハケは、実測図によるなら、複帯で全周するもの（同上：図版91-18、図版92-3)、複帯のハケが切れ切れに断続するもの（同：図版91-19、図版92-1・4）など種々みられる。

ほぼ同じような段階と考えられる八重塚遺跡の甕と並んで、E2a・E2b類、E3a・E3b類のS字甕の「祖型」の甕を含む資料であろう。ただし、米倉山B遺跡、八重塚遺跡の甕とE2a・E2b類、E3a・E3b類のS字甕の間には、なお1、2段階の懸隔があると推定される。

21）　赤塚のS字甕の分類、編年についての考え方の変化を細かく跡付けること（加納2000）はできないが、赤塚が1996年の時点で、S字甕B類を、「甕C（S字状口縁台付甕）」のうちで「口縁端部に明瞭な面を有する」（赤塚1996：117頁）ものと一言で規定していることは看過できない。

22）　野中遺跡1号住居跡出土土器（宮井2011：第12図67・71・72)、同11号住居跡出土土器（同：第22図11・12)、同遺物集中区出土土器（同：第33

図 85・86・93)。不連続斜めハケと思われるハケの多くは、外面に施されたハケの下端が小刻みな鋸歯状になるものであり、S 字甕 A・B 類に多くみられる手法のようである。他にもいくつか装飾的かと思われるハケの施された台部片が出土している。在来の台付甕 C 類の台部には、この種のハケはみられない。

23) なお、川越田遺跡 D 地点 51 号住居跡より多量に出土した土器中に、台部を欠くも残存率の高い E3b 類の甕が 1 点みられる (大谷・福田 2011：第 121 図 198)。福田 聖が示したように (同：296-298 頁)、同住居跡出土土器は、2 時期 [ないしは 3 時期] の土器が混交しており、古墳時代前期中葉・末葉の土器を主とするとみられる。櫛描文土器も 3 点出土しているが (同：第 116 図 116・117、第 117 図 127)、破片資料であり、混入した遺物であろう。

川越田遺跡D地点51号住居跡出土のE3b類の甕は、後述する社具路遺跡 4 号土坑出土の甕(第 4 図 27)(長谷川・石橋・山川ほか 1987b: 第 168 図 5) とともに、前期中葉の古い段階にわずかに残存した E3b 類の甕の例とみて大過ないかと思われる。

24) 静岡県西部、西遠江を含む東海東部の「古式土師器」の編年案を提示した中嶋郁夫が「欠山様式や元屋敷様式西遠江型の新段階の検出資料数に比べ、B 類 S 字状口縁台付甕を主体とする古段階の資料数は極めて少ない」(中嶋 1997：31 頁) と記し、同じ西遠江の「古式土師器」の編年案を再検討した鈴木敏則が「西遠江において B 類古段階がほとんど認められないのは、A 類がそのまま残存したのか、B 類古段階が極めて短い期間存在した型式であったと考えられる」(鈴木 2002：190 頁) と記した問題である。

25) この推定を裏付ける資料がないではない。先に参考資料として掲げた米倉山 B 遺跡山 8 号住居跡出土土器 (註 20) 参照) に後続する資料が、山梨県南アルプス市大塚遺跡 A 区 3・4・9 号住居跡などから出土している (新津 1995：第 7・11 ～ 13・24 ～ 26 図ほか)。

台付甕は、いずれも口縁部の屈曲の弱い S 字甕 (受口甕と呼んでもよい甕をかなり含む) で、口縁部外面の刺突文も形骸化しており、刺突文のみられない個体もみられる。外面胴部上位の横ハケも切れ切れのもの、ハケが間隔をあけて施されるものなど様々である。また、横ハケがくびれ部から離脱するものもみられる。くびれ部内面の横・斜めの不規則なハケの有無も区々である。

口縁部外面の刺突文の脱落と外面胴部上位の横ハケのくびれ部からの離脱がどのような経過をたどり生じたのかを物語る資料であろう。

26) 本地域の S 字甕の故地の問題に関連して、愛知県廻間遺跡などの出土土器の胎土分析 (永草 1994、矢作健二 1990 ほか) を踏まえ、赤塚次郎が指摘した「粘土補充技法 [手法]」(赤塚 1990：48-49 頁、同 1997：59-63 頁)、S 字甕に特有の胴部・台部接合部の上・下面に、砂粒を多く含んだ、あるいは色調の異なる粘土を充填する手法は、極めて重要である。

本地域、とくに女堀川中流域の一部の遺跡では、E 類、S 字甕に「粘土補充技法」が顕著にみられる。精査してないため概略を記すことしかできないが、報告書に図化された S 字甕によれば、女堀川中流域上部の後張遺跡 A 区出土の S 字甕の大半に「粘土補充技法」がみられ (増田・立石 1982a・b)、より下流、中流域下部の久下東・久下前遺跡では、河川跡に限っても、半数くらいの S 字甕に「粘土補充技法」がみとめられる (恋河内 2010 ほか)。

拠点的な規模の大きな集落跡に多出する傾向がみられる一方、女堀川中流域上部、後張遺跡に隣接し、しかも規模の大きな遺跡でありながら、川越田遺跡のように、同種手法が低調な遺跡もみられる (赤熊・富田 1985、大谷・福田 2011、恋河内 1993 ほか)。また、雷電下遺跡 A 地点 25 号住居跡出土土器 (横川・増田・駒宮 1979：第 47 図)、美里町北貝戸遺跡 11 号住居跡出土土器 (長滝・中沢 2006：第 34 図) のように、遺構単位で同種手法が卓越する例もあるらしく、予断を許さない。

土器の製作者や製作地を暗に示す「隠し文字」のような手法でもあり、今後村上吉正、西川修一が行なったように (村上・西川修一 2000)、同手法をより綿密に精査するとともに、自然科学的な方法による胎土分析 (藤根・米田 2018 ほか) を活用する必要があると考える。

27) 以下の出土例を掲げることができる。久下前遺跡 A1 地点河川跡出土土器 (恋河内・的野 2010：第 118 図 61 ～ 63)、同遺跡 C3 地点 103 号住居跡出土土器 (本稿：第 4 図 41)(恋河内・藤根ほか 2018：第 124 図 7)、同遺跡 C4 地点河川跡出土土器 (同書：第 324 図 94 ～ 96)、同遺跡 G 地点河川跡出土土器(本稿：第 4 図 42)(恋河内・藤根ほか 2020：第 153 図 101 ～ 106)。

28) 古墳時代中期前半と考えられる後張遺跡 C 地点 204 号住居跡からは、平底甕ではあるが、F 類と同様に口縁部が伸長した甕が出土している (恋河内 2005：第 48 図 1)。